

園舎建替による環境の変化が
幼児の遊びの動線と関わる相手に及ぼす影響

大 島 みずき

**The Impact of Changes in Kindergarten Building Environment
for Flow Line and Relationship in Children's Play**

Mizuki OSHIMA

園舎建替による環境の変化が 幼児の遊びの動線と関わる相手に及ぼす影響

大島 みずき

群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

(2021年9月29日受理)

The Impact of Changes in Kindergarten Building Environment for Flow Line and Relationship in Children's Play

Mizuki OSHIMA

Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

(Accepted on September 29th, 2021)

問題と目的

無藤 (2012) は、幼児が出会う環境について、園にあるもの全てが環境であると述べている。幼児の日々の生活、そして発達にはどのような環境で彼らが過ごすかが大きく関わっている。幼稚園教育要領 (文部科学省, 2017) においても、総則にて教師が「幼児が人や者との関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成する」必要性が述べられており、幼児にとって園環境の重要性が確認できる。

ここで示される環境の意味はとても広いものであることにも意識を向けるべきだろう。幼児を取り巻く環境には、ハードとソフトの2つの側面が考えられる。環境のハード面とは保育室やその中の遊具など物理的な側面、ソフト面とは教育課程や保育内容など保育の内容的な側面と言える。

幼児の発達を支える幼児教育の環境のハード面の中で最大のもは園舎や園庭といった園の建物の構造全体である。これまで、建物の構造の物理的な環境構成が子どもたちに与える影響については保育の視点のみならず建築の視点からも研究が行われてい

た (例えば福田・無藤・向山, 2000; 仙田, 1995 など)。その中で汐見ら (2012) は乳児については回遊できる空間の経路上に動的・静的なより規模の小さい空間を配置することで、子どもの行動がより落ち着き、集中度の高いものとなる可能性を示している。また、大島 (2021) は園舎建替時の仮園舎の制限された環境が幼児の社会的行動に影響する可能性も示唆している。ただし、渡辺 (2012) は異年齢との関わりという意味ではそれぞれが自分たちの場を「緩やかに守っている」ことが重要であると述べており、異年齢で関わる中にも年齢で独立した空間の必要性を提案している。つまり先行研究からは幼児教育施設における物理的な園舎環境は過剰な制限がなく、かつある程度「その子の居場所」が明確になることが求められていると言える。園舎の形はその園の保育理念や教育目標、そして環境的な制限により様々であり、その自由度も高い。どのような園舎空間をその園が持つかにより、子どもたちの動きや、そこから生まれる遊び、そしてそこで彼らに育まれる力もまた変わってくるだろう。

先述したように幼児教育施設はそれぞれの園で教育目標や教育課程、日々の保育内容が異なる。その

ため園舎環境などによる幼児の活動の違いを検証するためには環境のソフト面の違いを加味する必要があるため、園舎環境のみの違いを検討することは難しい。しかし、園舎園庭を設計するにあたり、その構造の違いによりどのように子どもの活動が変わるのかを検証することは非常に重要なことであろう。

そこで、本研究では建替を行う幼稚園において建替の前後での幼児の動線を調査する。このことで、環境のソフト面を統一した上での幼児の園舎環境の違いによる幼児の動きの違いを検証することが期待できる。

遊びの動線

幼稚園教育要領（文部科学省，2017）によると遊びとは、「心身の調和の取れた発達を担う重要な学習」である。幼児が夢中になって試行錯誤し、それが許される「幼児が遊びこむ経験が豊富にできる環境」は将来的に子どもが色々なことに好奇心を持ち、自信を持って取り組み、必要であれば友達と協力し、助けを求め、さらに我慢もできるようになることにもつながるとされている（ベネッセ教育総合研究所，2016）。

遊びとは基本的には他者から目的を与えられずに繰り返される行動である。そのため、遊びの中では様々なことを自分で選択しなければならない。何をしたいか、何ができるか、何をを使うか、誰と遊ぶか、どこで遊ぶかなど、遊びの中で幼児は様々な選択とそれによる失敗、そして成功を繰り返している。そして保育者はこのような幼児の主体的な活動が確保されるよう保育を行うことが求められている（幼稚園教育要領，2017）。

では、このような遊びの質が保障されているかはそのよう捉えればいいのか。日本保育学会課題研究委員会報告（2011）においても、遊びの質についての検討は重要な課題であるとされながらも、保育現場によって遊びの在り方が違うことなどから、その難しさが指摘されている。その後、日本保育学会課題研究委員会報告（2014）においては質の高い遊びについて「協働協同協力」「自主自発自律」「集中熱中没頭」などの22カテゴリーが示された。本

研究に関わる園舎環境の影響が考えられるカテゴリーとしては「十分な時間空間環境」が挙げられている。また、「質の高くない遊び」については「大人一方的」「安直」「まんねり」など21のカテゴリーが示され、園舎環境の影響が考えられるカテゴリーとしては「管理制限（規制が多いなど）」「不十分な時間空間環境（遊び空間の不足、安定した場がないなど）」があるだろう。つまり幼児期の充実した遊びには一定の制限がない、幼児自身がその場の選択ができることが重要になると考えられる。これは先行研究として挙げた汐見ら（2012）や大島（2021）にもつながることである。本研究では遊びの質についてその選択できる空間が保障されているか、また、渡辺（2012）が述べるような落ち着ける場所が保障されているかについて幼児の遊びの動線から探ることとする。

年中幼児の遊びの動線を検討した大島・山田（2019）においては、夏よりも秋の動線の方が幼児の動きに自由度が上がっていること、また一つの場所にじっくり止まって、落ち着いて遊ぶことが多くなることが示された。大島・山田（2019）ではその理由として夏から秋にかけて幼児が年中児として幼稚園の環境に慣れ、安心してその環境を使いこなしていくようになることを挙げられており、同じ空間であっても使い方によっては質の高い遊びが展開されることが動線から示されている。保育内容が同じ幼稚園において園舎が変わることで遊びの動線にどのような違いが見られるのだろうか。

遊びの中の関わる相手

幼稚園や保育園、幼保連携型認定こども園といった幼児教育の施設は子どもにとって初めての「社会」である。この中で子どもは自分の家族や身近な知り合い以外の子どもや大人との様々な関わりを経験する。多くの場合、幼児が関わる相手は同年齢であると考えられる。田中（1998）は、3-5歳の幼児へのソシオメトリック調査から、4、5歳児は3歳児よりも一番遊びたい友だちの選択理由として能力や人柄などを挙げるが多くなることを示している。このことを踏まえると4歳児からは遊びの中で誰と

遊ぶかを自然と選択していることになる。このように幼児期の仲間関係に関する先行研究には、ソシオメトリックテストを使用した研究が多い（田中, 1998 の他にも中台・金山・前田, 2003, 大島・中澤, 2012 など）。しかし、ソシオメトリックテストは基本的には同じクラス（もしくは同じ学年）の中の仲間関係を検証するためのものであり、日常の保育の中で見られる同じクラス以外の仲間関係ややり取りについては遊びの中の他者との関わりという点から検討されることは少ない。

幼稚園には様々な人が存在して同じ時間を共有している。様々な年齢、立場の人々と関わりが持てるということも幼児教育の施設にとっては重要なことであろう。先述した日本保育学会課題研究委員会報告（2014）においても「質の高い遊び」の「協働協同協力」の中には異年齢交流も含まれており、さらに「質の高くない遊び」の「協調性の弱さ」には限られた子が遊ぶこと、「まんねり」の中には多様性がないことが含まれており、様々な人との関わり合いが質の高い遊びを導くことが示唆されている。また、様々な人と関わることで、幼児が多くのことを学ぶことも期待されている。異年齢保育の実態を調査した島田（2021）では、調査園の8割以上が全体的、もしくは部分的に異年齢保育を実施していた。異年齢保育を実施する中で年齢差から生じる「憧れからの挑戦や模倣」「教える一教えてもらう体験」や様々な年齢の子どもが一緒にいることによる「他者への思いやり」そして「多様性を認め合う仲間関係」が期待されていることが示された。様々な年齢の幼児、そして大人が混在する園舎・園庭内ではこれらの人々との遊びの中での偶然の遭遇が遊びを充実させたり、葛藤や相手を気遣う経験の場となったりするのかもしれない。

一方で、幼児期に誰と関わるかは、彼らが生活する環境に大きく影響を受ける。例えば、遊ぶ場所が保育室の中だけに制限される環境下では、年齢が異なる幼児同士が遊びの中で自然に関わることはほとんどないだろう。また、職員室などが別棟にある園の場合などは担任以外の大人と関わることも少ないかもしれない。そこで本研究では、園舎環境の違い

が幼児の遊びの中の他者との関わりにどのように影響するかについても合わせて検討する。そのため、遊び相手を自分で選択する時期であると考えられる年中児を対象とする。さらに、関わる相手については、その傾向が年度を超えて維持されるものであるかを検討するために、建替後さらに続けて検証を行なっていくこととした。

方 法

調査対象園：群馬県内の X 幼稚園。「健康でいきいきした子どもに育てる」ことを教育目標に、子どもたちのおもいおもいの遊びを中心とした保育が行われている。20XX 年に園舎が建てかわり、新園舎・園庭となった。

記録を行った園舎の特徴：建替前の園舎（園舎 A）と建替後の園舎（園舎 B）についてそれぞれの特徴を示す。

園舎 A：年少から年長の計 5 クラス全ての保育室が園庭に面して横一列に並んでいる、いわゆるハーモニカ型の園舎である（Figure 1）。対象となる年中保育室は中央に配置されている。園舎中央に位置する遊戯室は自由に遊ぶ時間の中では年中児は使用できないきまりとなっている。保育室及び遊戯室、職員室等は全て園庭に面していない廊下でつながっている。幼児は園庭に面したテラスから保育室に入る。園庭には幼児が「入ってはいけない場所」は基本的にはなく、思いおもいに遊ぶ時間の中では保育室と園庭の出入りは自由である。年長の保育室の前の園庭は職員・幼児から「年長の庭」と呼ばれており、一部年中児の使用が許可されていない大型遊具がある。年中保育室の正面に年中が主に使用する砂場がある。

園舎 B：全学年（5 クラス）の共有スペースであるプレイルームを中心に保育室及び職員室が配置されている（Figure 2）。園舎内は廊下、ウッドデッキにより周回できる。ウッドデッキは上履き・外履きどちらでも活動できる場となっている。対象となる年中の保育室は園庭から最も離れた場所にあり、年中児はウッドデッキにある靴箱付近で靴を履き替え、

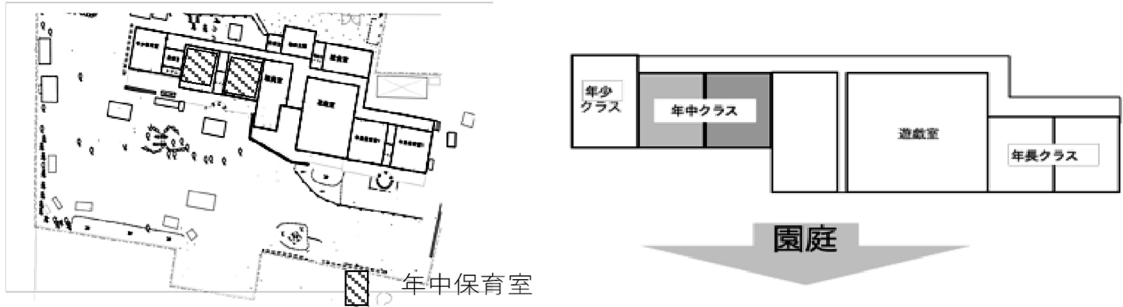


Figure 1 園舎 A の配置図

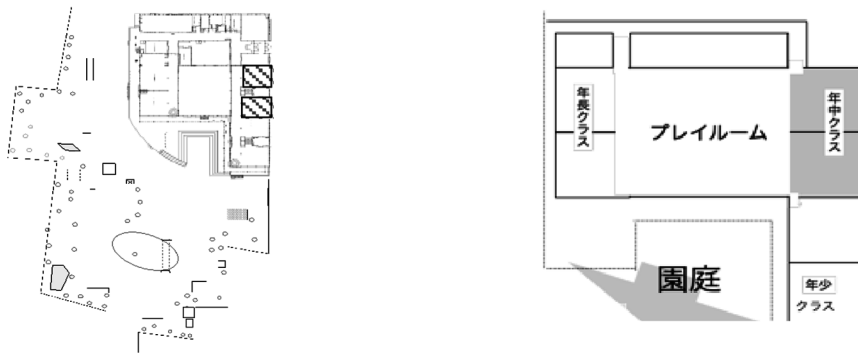


Figure 2 園舎 B の配置図

廊下から保育室に入る。園庭には幼児が「入ってはいけない場所」は基本的にはなく、おもいおもいに遊ぶ時間の中では保育室と園庭の出入りは自由である。園庭の中央に2mほどの築山があり、年中が主に使用する砂場はその奥にある。

調査時期及び記録対象児：20XX-1年及び20XX+1年7月の各時期の年中児12名（各組6名，男女同数）の登園からおもいおもいの遊びの場面を記録した。記録対象児はランダムに選択した。なお，20XX-1年についてのデータは大島・山田（2020）と同一のデータを使用している。さらに，20XX+3年に11名（男児5名，女児6名）を対象に同様の調査を行なった。

動線の記録方法及び倫理的配慮：対象となる幼児が登園したところから調査者1名が保育に積極的に参加しない観察者の立場としてビデオカメラによる撮影を行った。この時幼児がどこにいるか，誰と関わっているかが分かるように撮影を行うことを心がけた。

撮影時間は対象園で幼児が登園から自由に遊ぶおおよそ90分（min77-Max90分）とした。なお，撮影中にクラスや学年での活動が入った際も保育者の許可がある場合は撮影を継続した。この時，着替えやトイレ，さらに昼食の始まりなど，担任保育者との打ち合わせの中で記録を行わない約束をあらかじめ決めていた場合についてはビデオカメラの記録を停止した。なおその間は同一の場所に滞在し，他者との関わりは見られなかったものとして扱った。

結果

動線の分析

20XX-1年，及び20XX+1年のデータについて得られた撮影データを元に動線を記録した。映像の中で幼児が登園時テラス（園舎A），ウッドデッキ（園舎B）についたところ（または最初に姿が確認できたところ）を起点に30秒ごとに幼児がいる場

所をプロットした。その後、幼児が移動した場合には次の場所のプロットと前の場所のプロットを線でつなぎ、幼児の動線とした。その際、映像を元に行ける限り幼児が動いた道と近いように線を引いた。

30秒後も幼児が同じ場所にいた場合は、その地点のプロットを大きく記録した。そのためプロットした円の半径が大きいほど、幼児が長くその場に滞在していたことを示す。

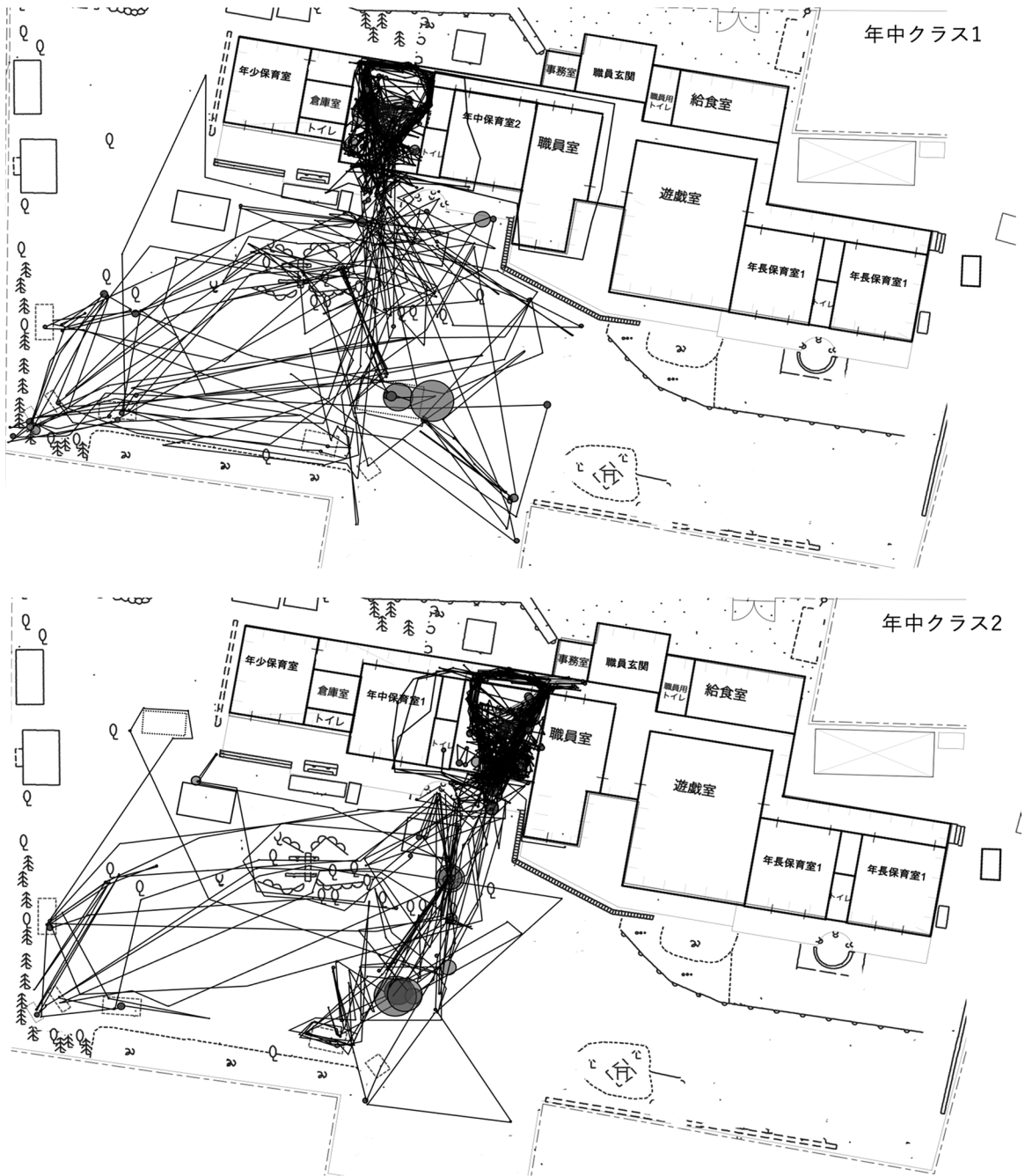


Figure 3 園舎 A における幼児の遊びの動線

幼児個人の動線について、時期ごとに同じクラスに所属する6名の動線を重ねたものをFigure 3, 4に示す。

園舎Aにおける幼児の遊びの動線 園舎Aにお

ける室内の幼児の動線 (Figure 3) については両クラスともに自身のクラスの保育室と、ロッカーが設置されている保育室に面する廊下への出入りが多くみられ、廊下と保育室の間で幼児が回遊している様子

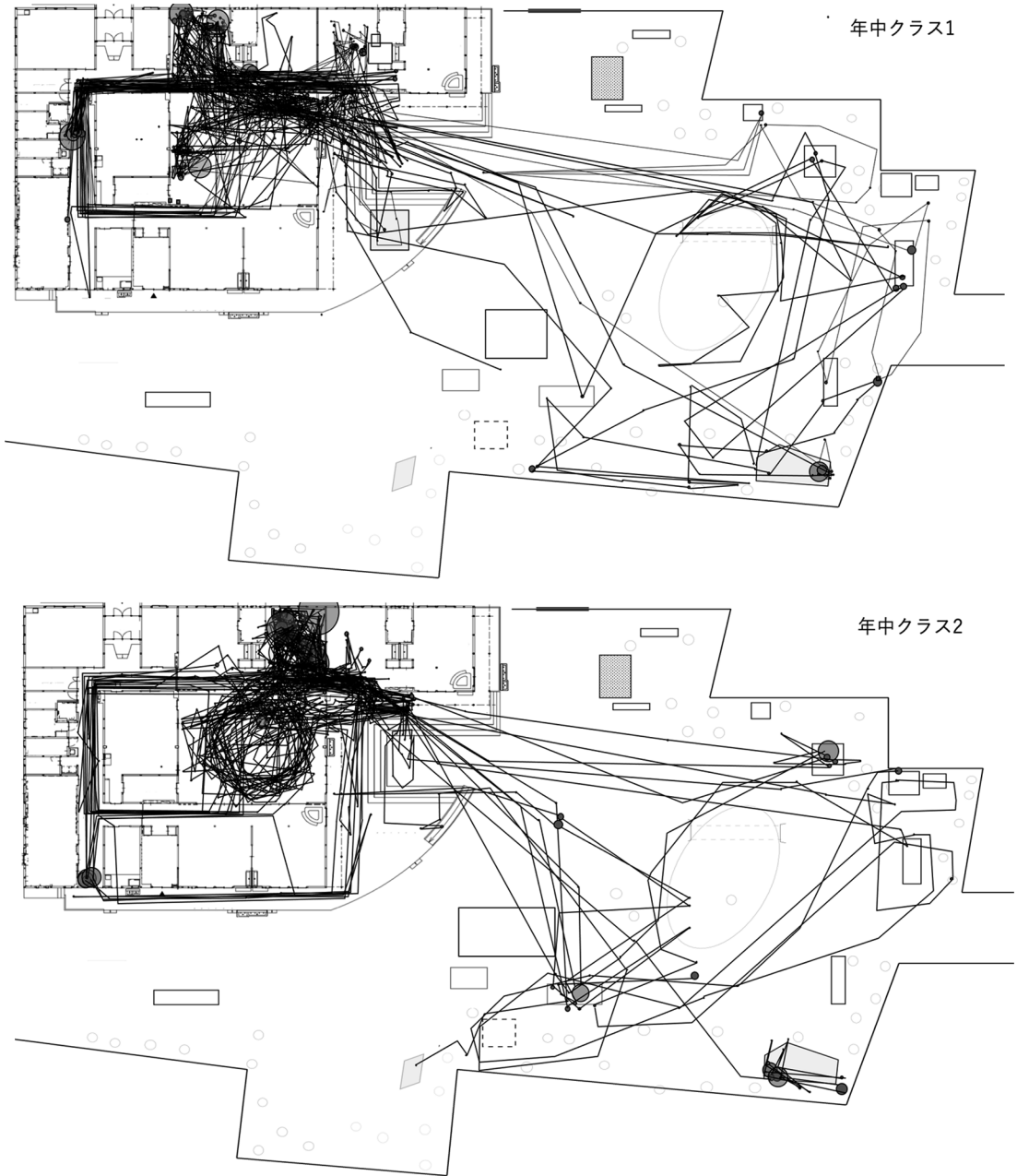


Figure 4 園舎Bにおける幼児の遊びの動線

が伺えた。

園舎の保育室以外の場所については隣の保育室への動線がわずかにみられるものの、その他の場所への動線はほとんど見られず、保育室以外の場所については遊びの中で使われていないことが示された。園舎 A では他の学年の保育室に行くことなどを禁止してはいなかったが、幼児の遊びが自身のクラス内でほとんど完結していた。

園庭での動線については保育室の前に動線が集中しているものの、園庭の図中左端まで遊びの範囲が広がっていた。園庭の図中左端には登り棒やブランコなどの大型遊具があり、保育室と大型遊具を行き来する動線も多く見られた。年長保育室前（図中右中央）へ立ち入る動線は見られなかった。

園舎 B における幼児の遊びの動線 園舎 B における園舎内の幼児の動線 (Figure 4) については、両クラスとも自身の保育室とウッドデッキだけでなく、園舎全体への広がりが見られた。他の学年の保育室の中に入るような動線はあまり見られなかったものの、廊下やウッドデッキを使い、園舎全体を回りながら活動を行っている様子が確認できた。園舎内では自身のクラスの保育室外の滞在時間が長い幼児が多く、保育室外の場所でじっくり遊ぶ幼児の姿が確認できた。

園舎 B における園庭については、動線自体が少ない傾向が見られた。園庭の動線は築山を中心として、年中がよく使用する砂場まで広がっているものの、年長保育室の前の空間などへの立ち入りは見られなかった。

関わる相手についての分析

20XX-1 年, 20XX+1 および 20XX+3 年の記録場面について 30 秒ごとに、同じクラスの幼児、隣のクラスの幼児、年長児、年少児、担任保育者、担任保育者以外の大人との関わりの有無をチェックした。関わりの有無については、以下の通りに基準を設定し、その行動が見られた際に「関わりあり」とし、それ以外を「関わりなし」とした。

同じ年齢の幼児との関わり

【同じクラスの幼児】対象幼児と同じクラスの幼

児との関わり。

- ・同じクラスの幼児が対象幼児に話しかけたり、接触したりしている場合。
- ・対象幼児が同じクラスの幼児に話しかけたり、接触したりしている場合。
- ・同じクラスの幼児が対象幼児を含む集団に話しかけ、対象幼児がそのことを理解している場合。

【隣のクラスの幼児】対象幼児とは異なるクラスの年中児との関わり。基準については【同じクラスの幼児】と同一。

異年齢の幼児との関わり

【年長児】同園の年長クラスの幼児との関わり。

- ・対象幼児が年長児、または年長児の集団と直接関わりを持っている場合。
- ・対象幼児が年長児、または年長児の集団と（直接的な関わりはなくても）同じ文脈で活動している場合。

【年少児】同園の年少クラスの幼児。基準については【年長児】と同一。

大人との関わり

【担任保育者】対象幼児のクラスの担任保育者（担任保育者が全日を通して不在の場合は、担任の役割を担う保育者とする）

- ・担任が対象幼児に話しかけたり、接触したりしている場合。
- ・対象幼児が担任に話しかけたり、接触したりしている場合。
- ・担任が対象幼児を含む集団に話しかけ、対象幼児がそのことを理解している場合。

【担任以外の大人】副担任（副担任が担任の役割を担う場合はその人物は除外する）、他学年の教員、幼稚園の他の教職員、撮影者など担任以外の大人。基準については担任保育者と同一。

調査者が評定を行った後、仮説を知らない大学生がランダムに選択した 6 名 (20XX-1 年, 20XX+1 より) について同様のチェックを行い、調査者との間の評定の一致率を算出した ($k = .67 \sim .92$)。一致しなかった箇所についてはその後、二者により協議を行い、修正を行なった。さらにその協議をもとに、一致率の算出に用いなかったケースを見直し、

関わりの有無の評定とした。同年齢（同じクラスの幼児、隣のクラスの幼児）、異年齢（年長児、年少児）、大人（担任保育者、担任保育者以外の大人）それぞれの相手との「関わりあり」の回数、「関わりなし」の回数それぞれの総数を求めた。時期によりその割合に違いがあるかを検討するため χ^2 検定を行なった。

同年齢との関わり (Table 1) 同じクラスの幼児については関わりありの割合は全体の59.5%–69.2%であった。 χ^2 検定の結果、時期により有意な偏りが見られた。残差分析の結果、20XX+1年の園舎Bにおいて関わりありの割合が期待値よりも有意に大きく、関わりなしの割合が期待値よりも有意に小さかった。また、20XX+3年の園舎Bにおいては関わりありの割合が期待値よりも有意に小さく、関わりなしの割合が期待値よりも有意に大きかった。

隣のクラスの幼児については関わりが見られた割合は全体の7.9%–25.2%であった。 χ^2 検定の結果、時期による有意な偏りが見られた。残差分析の結果、20XX+3年における隣のクラスとの関わりありの割合と20XX-1年における隣のクラスとの関わりなしの割合が期待値よりも有意に大きいこと、さらに20XX-1年及び20XX+1年の隣のクラスの幼児との関わりありの割合が期待値よりも小さいことが示された。

異年齢との関わり (Table 2)：年長児との関わりが見られたのは全体の1.0–4.1%であった。 χ^2 検定の結果、時期により有意な偏りが見られた。残差分析の結果、20XX+1年の園舎Bにおいて年長児との関わりありの割合が期待値よりも有意に大きく、20XX-1年の園舎Aにおいては有意に小さかった。

年少児との関わりはどの時期でも全体の1.1–1.3%ほどであり、 χ^2 検定では時期による有意な偏りは見られなかった。

大人との関わり (Table 3)：担任保育者との関わりが見られたのは全体の5.4–9.3%であった。 χ^2 検定の結果関わりの有無について時期による偏りが有意であった。残差分析の結果、20XX-1年の園舎Aにおいて担任保育者との関わりが期待値よりも有意に少なく、20XX+1年、20XX+3年の園舎Bでは

Table 1 同じ年齢の幼児との関わりの有無

() 内は時期内の割合

	同じクラス		隣のクラス	
	関わりあり	関わりなし	関わりあり	関わりなし
20XX-1年	1271	797	164	1904
【園舎A】	(.62)	(.39)	(.08)	(.92)
20XX+1年	1495	665	285	1875
【園舎B】	(.69)	(.31)	(.13)	(.87)
20XX+3年	1179	801	498	1482
【園舎B】	(.60)	(.41)	(.25)	(.75)
合計	3945	2263	947	5261
	(.64)	(.37)	(.15)	(.85)
統計値	$\chi^2(2)=47.51, p<.01$		$\chi^2(2)=242.93, p<.01$	

Table 2 異年齢の幼児との関わりの有無

() 内は時期内の割合

	年長児		年少児	
	関わりあり	関わりなし	関わりあり	関わりなし
20XX-1年	21	2047	22	2046
【園舎A】	(.01)	(.99)	(.01)	(.99)
20XX+1年	89	2071	29	2131
【園舎B】	(.04)	(.96)	(.01)	(.99)
20XX+3年	42	1938	28	1952
【園舎B】	(.02)	(.98)	(.01)	(.99)
合計	152	6056	79	6129
	(.02)	(.98)	(.01)	(.99)
統計値	$\chi^2(2)=43.95, p<.01$		$\chi^2(2)=1.12, n.s.$	

Table 3 大人との関わりの有無

() 内は時期内の割合

	担任保育者		担任以外の大人	
	関わりあり	関わりなし	関わりあり	関わりなし
20XX-1年	112	1956	103	1965
【園舎A】	(.05)	(.95)	(.05)	(.95)
20XX+1年	201	1959	149	2011
【園舎B】	(.09)	(.91)	(.07)	(.93)
20XX+3年	183	1,97	105	1,875
【園舎B】	(.09)	(.91)	(.05)	(.95)
合計	496	5,712	357	5,851
	(.08)	(.92)	(.06)	(.94)
統計値	$\chi^2(2)=27.95, p<.01$		$\chi^2(2)=8.24, p<.05$	

担任保育者との関わりが期待値よりも有意に多かった。

一方、担任保育者以外の大人との関わりは5.0–6.9%であった。 χ^2 検定の結果、20XX+1年の園舎Bにおいて担任保育者以外の大人との関わりが期待よりも多く見られた。

考 察

建替による幼児の動線の違い

園舎内についての動線の比較 園舎内の動線から、建替後の園舎 B の方が建替前の園舎 A よりも回遊性が高い園舎となっていると言えるだろう。園舎 B においては園舎の中を一回りする廊下の動線が多く見られることから、汐見ら (2012) が示すような回遊性がある上で、中央に配置されたプレイルームの角や保育室の中には一つの場所での滞在時間が長いことを示す大きな園も数多く見られる。つまり、園舎 B については園舎を回遊しながらも保育室外でもじっくり遊ぶ幼児の動きが確認されたことになる。このことから園舎 B においては室内での遊びが充実している可能性が示唆された。さらに、園舎内をぐるぐる回することで他のクラス、学年の活動にも興味を持ち、遊びや人間関係を広げていくような活動も今後は期待できるかもしれない。その一方で、自身の保育室内への滞在も同様に多く見られることから、渡辺 (2012) が異年齢の幼児が関わる際に必要であると考えた自分の居場所や、大島・山田 (2019) でその必要性が述べられている幼児にとっての「拠り所」となる場所もしっかり確保されていることが考えられる。

園庭についての動線の比較 園庭については建替前の園舎 A の方が園舎 B に比べ、幼児が多く行き来していることが示された。この結果が生じた理由の一つとして、園舎における保育室の配置が考えられるだろう。園舎 A は保育室から園庭の様子がよく見え、さらに、園庭に出るための経路も短かった。そのため幼児が保育室内から外の園庭の魅力を感じやすく、さらに靴箱があるテラスへの動線も単純であり幼児が「外にでたい」と思った時に躊躇なく園庭に出られる構造となっていた。一方、園舎 B の年中の保育室からは園庭を見ることは難しい。そのため保育室内にいる幼児が園庭の様子を見ることができず、そこから外に魅力を感じにくい。また、保育室からウッドデッキに設置された靴箱までも距離があるため、「外に出たい」と思っても行動に移すまでの負荷が高くなっているのかもしれない。さら

に園舎内で回遊できること、保育室の前に開けたプレイルームがあること、さらに上履き外履き兼用のウッドデッキがあることから、幼児に外に出る必要感が低いことも懸念される。このような環境の結果、園舎 B では幼児の外への動線が少なくなっている可能性がある。今後は園庭の様子が見えづらい年中の保育室では特に幼児が保育室内にいながら、屋外の活動に魅力を感じられるような環境の工夫が必要となってくるだろう。

建替による関わる他者の違い

同じ年齢の幼児との関わり 同じ年齢の幼児との関わりについては園舎による違いは見られなかったが、園舎 B において 20XX+1 年と 20XX+3 年の間で偏りが見られた。この偏りが生じた理由の一つとして 20XX+3 年において隣のクラスの幼児との関わりが多く見られたことが挙げられるだろう。年中児は友だちを自分で選択し、「その子と一緒に過ごすこと」を楽しむ時期である。20XX+3 年においては幼児が自身のクラスに囚われずに一緒に遊びたい相手を選択するようになったため、隣のクラスの幼児と遊ぶことを選択する幼児が増え、自身のクラスの幼児との関わりが相対的に少なくなったのではないだろうか。

実際、20XX+3 年の段階では、2 つの保育室の間に 2 つのクラスで同時に使用できる共同の制作コーナーを設けたり、プレイルームに年中クラス共同の大型積み木を設定したりするなど、年中児が隣のクラスの幼児と関わりやすくなるような保育環境の工夫が保育者によってなされていた。

異年齢の幼児でも関わり 年長児との関わりについては園舎による差が見られ、園舎 B の方が園舎 A よりも年中児が年長児と関わりを持つことが多かった。記録した映像でも年中児が保育室前のプレイルームで遊ぶ際や園庭で遊ぶ際に年長との短い関わりが見られていた。園舎 A ではほとんど見られなかった関わりが見られるようになったということはプレイルームなど学年を超えて空間を共にしたことによる変化であると言えるだろう。

一方で、年少児と関わりを持つ割合については園

舎による差は見られなかった。年少児については、園舎A、園舎Bどちらにおいても、園舎内では自身の保育室から出ることがあまりなく、さらに園庭もそれほど広くは使っていないため、年少児が年中児と遭遇する機会自体が少ないことが伺える。これは、年少という時期がまずはクラスの中で保育者との安心感を作る時期にあたるためであることも理由となるのかもしれない。

大人との関わり 大人との関わりは担任保育者、担任以外の大人をそれぞれで各時期10%未満であり、調査において対象となった幼児が大人につききりではなく、自分でどんどん活動している様子が伺えた。

その一方で、担任保育者については園舎Bのどちらの時期においても、そして担任以外の大人については園舎Bの20XX+1年において幼児との関わりが多いことが示された。つまり、園舎Aでは園舎Bより担任保育者、担任以外の大人との直接的な関わりが少なかったと言えるだろう。Figure 1からも分かる通り、園舎Aはハーモニカ型の園舎であり、それぞれの保育室から園庭の様子がよく見え、園庭からも保育室の中で何が起きているかを把握することができた。また、同様に幼児にとっても直接関わらなくても保育者が自分を見てくれているという安心感を持てる空間だったのかもしれない。

一方で園舎Bの年中の保育室からは園舎の構造、園庭の様子を伺うことは難しい。そのため、保育者はより遊ぶ幼児と直接関わりを持ちながら彼らが遊びの中で何を楽しんでいるのかを掴んだり、危険がないかの確認を行ったりする必要があるのかもしれない。

全体のまとめと今後の保育への提案

園舎の構造が異なることで幼児の遊びの動きが影響を受けること、そして園の中の活動場所が増えることで年中児については隣のクラスの幼児や年長児と関わる機会が増えていることが示された。また関わる相手については継続した調査によりそれが年度を超えて維持される可能性が示唆された。

園舎・園庭の「回遊性」、そしてそこから生じる

様々な立場の子どもや大人との関わりが増えることは園舎建替においてねらい一つとされていた。実際、建替後の園舎、園庭はその場を使用する学年が限定されていないことから、子どもたちが園舎を自由に動き回る様子が本調査からも確認され、さらに様々な年齢の幼児が同じ空間で遊ぶ姿を頻繁に目にするようになった。

しかし、本研究において示された年中児の異年齢児の関わりは全体的に5%未満であり実際の関わりは決して多くはない。つまり、年中幼児は異年齢児と同じ空間で遊んではいらぬものの、そこに実際の関わりや繋がりはない状況が多いのではないだろうか。もちろん、幼児の発達段階や状況によっては異年齢との関わりよりもまずは同じ年齢、同じクラスの子どもたち、そして担任保育者との関わりが重要である場合もあるだろう。彼らの発達段階に留意しながらも、同じ空間の中に様々な人がいるという状況を子どもたちが当然と思い、必要であればそこで時間を共有し実際の関わりを持つタイミングが自然に図られることが望まれるのだろう。そのためにも、年中児の2つのクラス間で見られた場や物の共有のような「関わり合いが持てる」環境の工夫が学年を超えて設定されていくことも今後必要になってくるだろう。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2016). 園での経験と幼児の成長に関する調査 https://berd.benesse.jp/up_images/research/Encyosa_web_all.pdf (2021/09/15)
- 福田秀子・無藤 隆・向山陽子 (2000). 園舎改善を通しての保育実践の変容 (1) 研究者と保育者によるアクションリサーチの試み 保育学研究, 38, pp.223-230.
- 文部科学省 (2017). 幼稚園教育要領 フレーベル館
- 無藤 隆 (2012). 保育実践と保育環境 (総説) 保育学研究, 50, pp.238-241.
- 中台佐喜子・金山元春・前田健一 (2003). 幼児の仲間集団における人気度と社会的スキル: 同性仲間と異性仲間からの評価 広島大学心理学研究, 2, pp.151-157.
- 日本保育学会課題研究委員会 (2011). 質の高い遊びとは何

- か？—遊びの質を規定するための条件— 保育学研究, **49**, pp.51-608.
- 日本保育学会課題研究委員会報告 (2014). 遊びの質をどう捉えるか. 保育学研究, **52**, pp.105-11.
- 大島みずき (2021). 中長期的な園舎環境の変化が幼児の社会的行動とストレスに及ぼす影響 群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編, **70**, pp.241-250.
- 大島みずき・中澤 潤 (2012). 幼稚園進級児・新入園児混合クラスにおける仲間関係の縦断的变化 千葉大学教育学部研究紀要, **60**, pp.115-119.
- 大島みずき・山田恵美 (2019). 幼稚園における幼児の遊びの動線—滞在時間及び動線の時期による違いに着目して— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **68**, pp.227-236.
- 仙田 満 (1995). 8章あそぶ：あそびの行動と空間 空間認知の発達研究 (編) 空間に生きる：空間認知の発達研究, pp.152-171. 北大路書房
- 島田知和 (2021). 異年齢保育の実態把握と今後の展望について 別府大学短期大学部紀要, **40**, pp.51-57.
- 汐見稔幸, 村上博文, 松永静子・保坂佳一・志村洋子 (2012). 乳児保育室の環境構成と“子供の行為及び保育の意識”の変容 保育学研究, **50**, pp.64-74.
- 田中美由紀 (1998). 遊びにおける他児認識の研究 エデュケア, **19**, 47-59.
- 渡辺のゆり (2012). 保育所における「0-5歳児たてわり保育」の検討—環境構成の視点から— プール学院大学研究紀要, **52**, pp.187-198.

謝辞

長期間にわたる調査に心よくご理解・ご協力いただいた園長, 副園長をはじめとする幼稚園の先生方に心から感謝申し上げます。

付記

本研究は2020年に日本保育学会, 日本教育心理学会総会において発表した内容をまとめ, データを追加し再分析を行ったものである。本研究の実施にあたりJSPS科学研究費の助成を受けた(18K13103)。

